様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：２５４０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００４１８

研究課題名（和文）カーヴァー作品における「食」と自然：環境文学作家としてカーヴァーを読み直す

研究課題名（英文）Food and Nature: Reading Raymond Carver's Ecological Fiction and Poetry

研究代表者
栗原　武士（Kurihara, Takeshi）

県立広島大学・地域創生学部・准教授

研究者番号：００４６２１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、1970から80年代を中心に活躍したアメリカ短編作家レイモンド・カーヴァーの作品における「食」のイメージを包括的に分析し、彼がジャンクフードやフェイクフードに代表される現代的な「食の衰微」に対する批判意識と、それによって逆照射される理想的な自然観および人間と自然との有機的関係性のイメージを作品中で提示していることを明らかにした。とりわけ彼の代表作の一つである「ささやかだけれど役に立つこと」の考察をとおして、現代的な工業食のイメージによって逆説的に理想化される牧歌的な生活様式（食文化および育児）と、作家の自然環境に対する問題意識が浮き彫りにされていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題では、これまでほとんど注目されてこなかったレイモンド・カーヴァーの食のイメージに着目し、現代的な工業食に対する作家の批判的なスタンスを明らかにするとともに、カーヴァーが食文化を含めた牧歌的な生活様式に対する憧憬を抱いていたこと、またそのような要素が彼の多くの作品において重要なロジックとして機能していることを示すことができた。このことにより、これまでは見落とされてきた環境文学作家としてのカーヴァーの側面を考察するための理論的な土台を形成することができ、ひいては現代社会と自然との有機的なつながりを考えるための一つの足掛かりを提供できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research project, the imagery of "food" in the works of American short story writer Raymond Carver, who was prominent mainly in the 1970s and 80s, was comprehensively analyzed. This study reveals his critique of the contemporary "deterioration of food" represented by junk food and fake food, and the idealized imagery of nature and the organic relationship between humans and nature. Particularly through the examination of "A Small, Good Thing," it becomes clear that Carver highlights the pastoral lifestyle (culinary culture and parenting) idealized paradoxically by the imagery of contemporary industrial food.

研究分野：現代アメリカ文学

キーワード：現代アメリカ文学　レイモンド・カーヴァー　食　環境文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1970 から 80 年代を中心に活躍した短編作家レイモンド・カーヴァーは、1938 年にワシントン州の片田舎に生まれ、1950 年代以降のアメリカで食の規格化・画一化が始まる前の食文化を知る最後の世代のひとりであった。また、彼は釣りやハンティングを通して自然と向き合う自分なりの姿勢のようなものを体得していたように思われる。彼の短編や詩に描かれるオーガニックな食と自然のサイクルのイメージは、彼が本質的にエコロジストの顔を持つ作家だったことを示すひとつの材料となると考えられる。彼のこのような側面はこれまでのカーヴァー研究においてはほとんど着目されておらず、たとえば代表作とされる「ささやかだけれど役に立つこと」などで登場するジャンクフードのイメージについても、これまでほとんど言及がなされてこなかった。カーヴァーの「食」の描き方に着目して作品を再解釈・再評価することにより、従来のカーヴァーの作家像をより幅広い視点で捉えることができるだけでなく、現代的資本主義を相対化する環境文学作家としての彼の新たな側面を示すことができると考えられる。

２．研究の目的

本研究の目標は、レイモンド・カーヴァーの作品における「食」のイメージを包括的に分析し、彼がジャンクフードやフェイクフードに代表される現代的な「食の衰微」に対する批判意識と、それによって逆照射される理想的な自然観および人間と自然との有機的関係性のイメージを作品中で提示していることを明らかにすることである。この試みを通して、本研究は従来ほとんど論じられることのなかった環境文学作家としてのカーヴァーの新しい側面に光を当て、彼の作品理解の新たな可能性を探るものである。具体的には①現代的工業食のイメージを通した「食の衰微」への批判・問題意識と、②オーガニックな「食」を通した理想的自然観の提示という、「食」をめぐるカーヴァー作品の特徴的な二つの要素を中心に考察することを目標とした。

３．研究の方法

カーヴァーの「食」のイメージを考察するための理論的基盤を構築するにあたり、本研究課題では現代の「食」の問題点を提示する社会学的・文化研究的文献を包括的にリサーチする必要があった。代表的な文献としてはエイミー・L・ティグナーとアリソン・カルースによるアンソロジー『文学とフードスタディーズ』 (Routledge 2018) や、カルース単独による『グローバル・アペタイト：アメリカン・パワーと食べ物の文学』 (Cambridge UP 2013)が挙げられる。またジタンジャリ・G・シャハーニ編『食と文学』 (Cambridge UP 2018)も、文学研究におけるフードスタディーズの重要な文献のひとつである。他方、カーヴァーがオーガニックな食のあり方を理想化する一方で工業食やジャンクフードにネガティブなイメージを付与するケースが多いことに鑑みて、ジャーナリストのマイケル・ポーランをはじめとするアメリカの「食」の工業化に対する批判的な調査・文献や、藤原辰志による「食の衰微」に関する著作などを総合的に活用することで、自然と食の伝統的な関連性の理論化を試みた。

　その上で、カーヴァーの短編作品や詩における食のイメージを詳細に分析し、その背景に作家のどのような政治的態度を見出すことができるかを考察した。具体的には短編「アラスカに何があるというのか」や「注意深く」に描かれるジャンクフード・工業食のイメージや、「ささやかだけれど役に立つこと」において描かれるポテトチップスやファーストフード、さらに従来のカーヴァー研究において聖餐の象徴として考察されてきたパンなどが主要な言及のターゲットとなった。

４．研究成果

(1) 令和２年度の研究実績

当初は本年度にインディアナ大学リリー図書館およびオハイオ州立大学トンプソン図書館所蔵のカーヴァーのオリジナル原稿の閲覧を予定していたが、コロナウィルス感染症の流行のため残念ながら渡米を中止せざるを得なかった。そのため、手元にある資料の再検討とカーヴァーの食に関する作品の考察を深める作業を進め、カーヴァー作品におけるジャンクフードのイメージが主として家庭崩壊や低所得層の精神的な閉塞感と結び付けられていること、及びその反面、自然と密接に結びついた理想的な食のイメージをカーヴァーが主に詩作品において利用していることを指摘する論考を大枠でまとめることができた。年度末までには、この研究成果を研究雑誌等への投稿を視野に、最終的な手直しを行った。本論考はカーヴァーの理想とする食のイメージが自然の物質循環のサイクルと密接に関連付けられていることを再確認することができたという点で、本研究課題の基礎となりうる重要な成果だといえる。

(2) 令和３年度の研究実績
本研究課題の２年目に当たる令和３年度は、資料収集と内容の確認、現代の食を描くカーヴァーの作品（詩・短編）や、過去のインタビューの再確認、現代の食、とりわけ工業的な食についての文献の洗い出しと整理など、文献を用いた作業については概ね順調に進んだ。その結果、カーヴァー作品におけるジャンクフードのイメージが主として家庭崩壊や低所得層の精神的な閉塞感と結び付けられていること、及びその反面、自然と密接に結びついた理想的な食のイメージをカーヴァーが主に詩作品において利用していることを指摘する論考「ジャンクからパストラルへ：カーヴァーにおける ［食の衰微］ とエコロジカルな自然観」を県立広島大学地域創生学部紀要に上梓することができた。コロナウィルス感染症の流行に伴う本務校の業務の増大を考えれば、研究に割くことのできる時間が限られる状況下で上述した論考をまとめることができたことは幸いであった。
　ただ、カーヴァーの作品の精密な分析にはインディアナ大学およびオハイオ州立大学所蔵のカーヴァーのオリジナル原稿を調査し、編集者による改訂の箇所と内容を正確に把握することが必要となる。この点については、令和３年度に予定していた現地調査が新型コロナウイルスの流行に伴う渡航制限等でキャンセルとなってしまい、必要な作業に大幅な遅れが生じることとなった。また、令和３年度には他の作品の分析結果について海外学会等で発表することも計画していたが、これも延期せざるを得なかった。

(3) 令和４年度の研究実績
令和４年度は前年度に上梓した論文「ジャンクからパストラルへ：カーヴァーにおける ［食の衰微］ とエコロジカルな自然観」（『県立広島大学地域創生学部紀要』）で明らかにしたカーヴァーの食のイメージと彼の自然観との関連性を敷衍し、彼の代表作のひとつとされる「ささやかだけれど役に立つこと」に描かれる食のイメージを中心的に考察した。平成 24 年と 28 年の現地調査で収集したインディアナ大学リリー図書館での研究メモ（カーヴァーのオリジナル原稿と編集過程についてのもの）と、すでに出版されているカーヴァーの編集前原稿を集めた短編集『ビギナーズ』に収録されている当初原稿との比較をベースに、カーヴァーがポテトチップに代表されるジャンクフードと聖餐の象徴であるパンとの対比を、現代文明社会と、より自然に近い前近代的な生活様式の理想という二項対立に重ね合わせていることを明らかにした。本研究内容は IAFOR International Conference on Arts & Humanities in Hawaii における「The Images of Food in Raymond Carver’s “A Small, Good Thing”」という研究発表にまとめることができた。
　本研究課題は令和４年度までを一定の区切りとして申請したものであり、当初は最終年度までに２本の論考を適切なメディアで発表することを目標としていた。しかしながら、新型コロナ感染症の流行に起因する渡航制限と、関連する学内業務の負担増加などが原因で、当初予定を遂行するための十分な研究時間を確保することができなかった。そのため、研究課題の令和５年度までの延長を申請することとなった。

(4) 令和５年度の研究実績
令和５年度は本研究課題の最終年度（4 年目）にあたり、コロナの流行等により延期となっていた海外出張を行った。主な目的は米国インディアナ州インディアナ大学ブルーミントン校のリリー図書館に収蔵されているレイモンド・カーヴァーの短編草稿および私信の閲覧であり、著作権のプロテクトによりインターネット上での公開・閲覧が認められない資料を確認することで、本研究課題に関係するカーヴァーの自伝的背景や作品分析上重要な編集過程での変更点、およびカーヴァーと親交の厚かった作家トバイアス・ウルフやリチャード・フォードなどの作家の私信も合わせ、さまざまな資料を具体的に確認することができた。
　また、令和４年度に行った学会発表「The Image of Food in Raymond Carver’s “A Small, Good Thing”」の内容に加筆修正を加え、「Pastoral, Parenting, and Potato Chips: Reevaluating Raymond Carver’s “A Small, Good Thing”」（『県立広島大学地域創生学部紀要』）という論考にまとめることができた。本論考では、クリスティーナ・ビーバー・レイクの 2011 年の論考 「テクノロジー・予測不能性・恩寵：レイモンドカーヴァーの [ささやかだけれど役に立つこと]」に依拠しつつ、ポテトチップスを食べる息子の描写を現存する３つのバージョン間で比較することで、従来のカーヴァー研究において重視されてきた宗教的な文脈のみには収まらない本作の社会批評性を考察した。この考察を通して、子供への愛憎入り混じった感情をしばしば吐露したカーヴァーが、本作ではパストラルな生活様式の中に理想的なペアレンティングのありかたを描き出そうとしていることを指摘した。

(5) 本研究課題の学術的意義や社会的意義

本研究課題では、これまでほとんど注目されてこなかったレイモンド・カーヴァーの食のイメージに着目し、現代的な工業食に対する作家の批判的なスタンスを明らかにするとともに、カーヴァーが食文化を含めた牧歌的な生活様式に対する憧憬を抱いていたこと、またそのような要素が彼の多くの作品において重要なロジックとして機能していることを示すことができた。このことにより、これまでは見落とされてきた環境文学作家としてのカーヴァーの側面を考察するための理論的な土台を形成することができ、ひいては現代社会と自然との有機的なつながりを考えるための一つの足掛かりを提供できたと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 栗原武士	４．巻 3
２．論文標題 Pastoral, Parenting, and Potato Chips:Reevaluating Raymond Carver’s“ A Small, Good Thing”	５．発行年 2024年
３．雑誌名 県立広島大学地域創生学部紀要	６．最初と最後の頁 139-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 栗原武士	４．巻 1
２．論文標題 ジャンクからパストラルへ：カーヴァーにおける「食の衰微」とエコロジカルな自然観	５．発行年 2022年
３．雑誌名 県立広島大学地域創生学部紀要	６．最初と最後の頁 159-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 栗原武士
２．発表標題 Carver の短編 “A Small, Good Thing” におけるパストラルの理想：パンとポテチとペアレンティングをめぐって
３．学会等名 日本英文学会中国四国支部第75回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Takeshi Kurihara
２．発表標題 The Images of Food in Raymond Carver’s “A Small, Good Thing”
３．学会等名 IAFOR International Conference on Arts & Humanities in Hawaii（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関